



この夏、アゼルバイジャンを訪れたとき、バスの中で転倒して足の骨を折ってしまった小杉さん（中央）。だが、松葉杖をつきながらも「来年はカストロ前議長の家日本庭園を造りたい」とますます意気軒高だ。

日本庭園文化を 世界に伝えるために

小杉造園株式会社・小杉左岐さん

東京世田谷区に本社のある小杉造園は、海外で日本庭園を造る活動に取り組んでいる。すでにアゼルバイジャンや韓国などで実績を上げている。「日本庭園の文化、そして日本文化を世界中に広めたい」というのが小杉左岐社長の夢だ。だが、今は日本国内でも、相続の問題で日本庭園が少なくなり、日本庭園造りの技術・技能を若い社員にOJTで教えるのが難しくなっているのが実情だ。

風で倒れた 実朝ゆかりの老銀杏

2010年3月10日、神奈川県・鎌倉の鶴岡八幡宮にある銀杏の木が強風のため倒れたことは、多くの人が記憶しているだろう。この銀杏、樹齢が800年から1000年といわれる大木で、鎌倉幕府3代将軍の源実朝はこ

の銀杏の木の前で暗殺されたと伝えられていた。だからこの一件は新聞やテレビでも報道されたのである。

「あれは、銀杏の木を大事にしすぎたからなんです」

小杉造園の小杉左岐社長が言う。「銀杏の木は、樹齢200年から300年にもなると、たいていの樹木は幹の中がうろ（空洞）になっているので

注意が必要なのです。だから上の枝を抜き（剪定する）、軽くして風通しをよくするのです。上が重くなってしまうと、風を受けたときの抵抗も大きくなってしまいます。おそらくあの銀杏は、由緒ある神の木だったので、枝を抜くことが少なかったのではないのでしょうか。また老人になると杖をつくのと同じで、銀杏に

も養生が必要だったのでしょ」

小杉さんは「自分たちが管理していれば、倒さずにすんだ」とは言わなかった。しかし、言外にはその自信が感じられた。

実際、小杉造園には、そう言えるだけの実績がある。たとえば2005年には、ソメイヨシノ発祥の地として知られる東京駒込の古木2本を、豊島区役所近くの公園に移植している。2006年には、東京渋谷区の日赤医療センターにあった樹齢500年の大銀杏の移植も成功させた。大型の重機も使うこうした移植は、ただ違う場所に植え替えればいいというものではない。地中深く張った根をある程度切り、枝も剪定し、なおかつ植え替えた場所で樹勢が衰えるようなことがあってはならないのだ。「根を調べて、どれくらいの水分を吸い上げているのか判断します。そのうえで張りすぎた根を切るのですが、水分を吸い上げている根を切るので、小屋(枝葉)をそのままにしていたのでは、消費量が多く水分が足りなくなってしまう。だから枝の剪定も必要なのですが、形をよく見せながら生かすためには、どの枝をどの程度切るか判断しなければいけません。そういう判断は、長年の経験によって培われた勘が働かなければできるものではありません」

今、こうした古木や大木を移植できる造園業者は、数が限られている。

減り続ける日本庭園

小杉造園は、延宝元年(1673年)に現在の東京都世田谷区北沢で農家を営むようになったのが起源とされている。やがて大正時代に入ると農業に加えて植木の生産業も営むようになり、昭和初期からは植木職として発展。戦前からは造園業にも参入した。そして植木職として3代目となる小杉さんが1978年に法人化した。その当時の従業員数は40名ほど。現在は100名近くにまで増えている。

当時、北沢周辺には佐藤栄作元首相の私邸をはじめ、政財界人や芸能人の豪邸が建ち並んでいた。小杉造園はそうした豪邸の庭の造営や管理を手広く手掛け、社業を発展させていった。もちろんそれらの豪邸には、贅を尽くした日本庭園が設えられたものもあった。

だが、近年、そうした豪邸は次から次へと姿を消している。相続税を払うため、土地を分筆したり手放したりする例が多いからだ。その結果、日本庭園の数も急減していった。それは小杉造園にとって、単に仕事が減るだけにとどまらない打撃を与えることになった。

「日本庭園を造る技術、技能は、現場でのOJTで教えていくしかありません。しかし、日本庭園が減ってきたため、OJT教育をできる機会も少なくなってしまっているのです」

日本文化のひとつであり、侘び、寂びの世界である日本庭園を造営す

る技術、技能をこのままでは次の世代に伝えられなくなってしまいます。小杉さんは日ごとにそんな思いを強くしていた。

しかもバブル崩壊後は、日本庭園に限らず造園や植栽などの仕事は減っていった。そこで小杉さんは、マンションの庭や植栽の維持管理などに手を広げる一方で、海外にも目を向けてきた。数年前には海外事業部を設けたほどだ。今、この事業部には、ドイツ人や韓国人の社員もいる。

海外に目を向けるひとつのきっかけとなったのは、技能五輪国際大会だった。世界中の若手技術者や技能者が集って腕を競い合うこの場に小杉造園が初めて選手を送り込んだのは、1999年の第35回モンリオール大会だった。もちろん参加した種目は、造園である。

だが、技能五輪自体、もともとスペインで始まったものだし、欧州は造園でも長い歴史と伝統がある。世



アカマツ(推定樹齢300年)の移植。(写真左上)2004年、移植前の写真。(写真右上)2007年移植開始。油圧ジャッキで根鉢を支える。(写真右下)移植開始。(写真下)移動中の様子。





62の国と地域から3,769名が参加した第39回技能五輪国際大会 日本・静岡大会で、強豪のヨーロッパ勢を抑え、造園部門で日本初の金メダルを獲得。



熱海研修所において、若手に作業講習を行っている。講師には、ベテランの職人、樹木や作業機械などの専門家などを招き、技術の伝承を実践。



界の壁は予想以上に高く、険しかった。第35回大会では4位入賞、続く第36回大会（2001年韓国ソウル）でも7位入賞を果たしたが以降は国内予選を突破することもできなかった。

技能五輪国際大会で金メダルを獲得

そこで小杉さんは一大決心をする。静岡県の熱海にあった企業の保養施設を買い取り、自社の研修所にしたのである。

「やる以上は勝つことを目指し、そのための努力、工夫を惜しまない。それが私の考え方です。それに造園業にとって社員が一番の財産です。だから研修所で英才教育を施すことにしたのです」

社内の反対を押し切って総額約1億円を投じて熱海に研修所をつくったのは2003年。そしてその努力が実り、2007年の日本大会では、同社の社員が見事金メダルを獲得したのであった。

しかも技能五輪の場で海外の人と接する機会が増えた小杉さんは、海外にある日本庭園に強い関心を持つようになった。もともとと海外旅行によく行っていた小杉さんは、それ以来、旅行先に日本庭園があると聞く

と、必ず見に行くようになった。そして、海外の日本庭園の多くが荒れているという厳しい現実を知ることになる。造園するときには日本から職人が行って、ていねいに指導して造ることが多いのだが、維持管理のことまでは教えていないケースが少なくないのだ。そのため小杉さんは、機会あるごとに、海外の日本庭園を維持管理するための助言をするようになり、さらに日本の庭園文化の普及にも努めるようになっていった。

「日本庭園には、限られた場所に自然を凝縮して表現する素晴らしい技術と文化があります」

そうした地道な活動が実を結び、2009年にはついにアゼルバイジャンの政府から欧州の造園協会経由で、同国のイスマイリ州に日本庭園を造るよう依頼されたのである。

「当初は庭造りの指導を引き受けたつもりでした。しかし、工事がなかなか進まないの、最後はうちの社員と一緒に1ヵ月間、現地に張り付いて作業しましたよ」

こうして出来上がった須弥山の日本庭園の広さは約2,650平方メートル。同国のイルハム・アリエフ大統領が訪れたときは、小杉社長が自ら大統領を案内し、三尊石の中央にある一際大きい石について「あれは大統領が国民を見守っている姿です」と説

明すると、アリエフ大統領は三尊石の近くまで登って大喜びしたという。

以後、小杉造園には海外からの発注が少しずつ増えていった。2010年には韓国で開かれた京畿庭園文化博覧会で「友情の庭」と名付けられた日本庭園を造営した。戦後、韓国で日本庭園が造られたのはこれが初めてであった。

「アゼルバイジャンではその後、労

(写真上) オーストラリアにてIMG CEOのグレック・フートン氏と小杉社長。(写真中・下) 熱海研修所にて海外からの研修生に日本文化を紹介。



働福祉大臣の庭も造りましたし、今また別の仕事が入っています。バーレーンにも営業のため、社員を行かせています。キューバでは20年前に造られた日本庭園が荒れているので、修復して欲しいと頼まれています。来年はアンゴラやベネズエラにも行かないといけません。文化芸術に東西の区別はありません。私は日本の庭園文化や日本の文化芸術を世界に広げたいと思っています」

毎年数十名を海外研修に派遣

そのために小杉造園では、熱海研修所に各国の日本駐在大使を招いたりもしている。海外から造園技術者や大学教員、学生などを招き、2週間、畳の生活をしてもらいながら日本庭園や日本文化に対する理解を深める取り組みも行っている。小杉さんはキエフの国立大学で講演をしたこともあるし、キエフ国立建築大学と小杉造園は産学協力協定も結んでいる。昨年、アゼルバイジャンで開かれた日本と同国の経済合同会議には、大手商社のトップなどとともに

小杉さんも出席し、観光と文化についてのプレゼンテーションを行った。「以前は、日本の庭園文化を広めることだけを考えていました。でも、今は庭園に限らず日本の文化を世界中に輸出したいと思うようになりました。日本が発展するには、輸出を増やすしかありません。文化の輸出を通じて、海外のものが日本に入ってくる可能性もあります。そうして国と国、お互いにとって利益になるようなお付き合いができれば、一番いいのではないのでしょうか」

そうしたさまざまな活動で、小杉さんは月に2回以上のペースで海外を訪れている。また毎年4月には、社員の海外研修も実施している。それもひとりや2人という規模ではない。今年はブルガリア、韓国、アゼルバイジャン、スリランカの各国にそれぞれ10名ずつくらい、計40名近くの社員が各国を訪れた。美しいものを見ることと視野を広げることがこの研修の大きな目的だ。

「うちはバブルのときにもビルを建てたりはしませんでした。資金に余裕があるなら社員に投資した方がい

いと考えているからです。おかげでバブル崩壊後もなんとかやってることができました。でも、当社がここまでやってこられたのは、これまでに会った方たちのおかげです。会った方たちが、私たちを引っ張ってきてくれたのです。私は本当に出会いに恵まれて、感謝しています」

最近では日本でも日本庭園を見る機会は少ない。日本人でも、日本庭園を理解している人はそれほど多くない。だが、古くから伝わるこの文化を、このまま廃れさせていいはずはない。小杉さんたちの想いと取り組みを知ったこの機会に、改めて私たち一人ひとりが日本庭園という文化について、考えてみる必要があるのではないだろうか。

[こすぎ・さき] 1946年生まれ。江戸時代から農業を営んでいた小杉家は、大正時代に造園業にも参入。小杉さんは「植木屋の3代目」として家業を継ぎ、1978年法人化に踏み切るとともに事業を大きく発展させてきた。2003年熱海研修所を開設、2007年ユニバーサル技能五輪国際大会・造園部門で金メダルを獲得。2009年アゼルバイジャン政府の要請で都市公園の中に日本庭園を造る。同年黄綬褒章受賞。「チャレンジして失敗を恐れるより、チャレンジしないことを恐れる」というホンダの故本田宗一郎氏の言葉が好きだと話す。「この年になってもチャレンジ精神が衰えない」と笑う。



広さが約2,650平方メートルもあるアゼルバイジャンの日本庭園。